

2026.7  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

とみ やま  
富 薬

7号

第48巻  
No.444



ビヤクブ *Stemona japonica* Miq.

(ビヤクブ科 *Stemonaceae*)

**生 薬**

ビヤクブ（百部） 春の芽吹く前、または秋に地上部が枯れた後に根を掘りあげ、水洗いし、ひげ根を取り除き熱湯をかけてから陰干しする。

**成 分**

アルカロイド：stemonine, stemonidine, tuberostemonin, isostemonidine, sinostemonine, protostemonine, paipunine等。

**効 能**

鎮咳、駆虫作用があり、中国では肺結核、百日咳、回虫症、蟯虫症などに用いる。シラミや疥癬、トリコモナスには煎液を外用する。江戸時代には茎を「しらみひも」といって、シラミやノミを忌避するために下着に縫い込みました。

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



種小名に*japonica*の学名が使われていますが、中国中・南部に分布する多年生草本です。根は多肉質、紡錘形で、数本から数十本が束生します。李時珍(1518-1593)は「この草は根の多いもので、百數十の根が一隊の部伍のようにになっているように見えるからかく名けたのだ」と言い、「百部」の名の由来としています。茎は叢生し、下部が直立、上部は他の物に巻き付き、長さ1-2mぐらいに伸びます。葉は3-4枚輪生し、卵状披針形、全縁もしくはわずかに波状を呈し、5-9本の平行脈があります。5月頃に開く花被片4枚からなる淡緑色の小さな花は花柄の下部が葉柄と合着しているため、葉の上に花が咲いているように見えます。萼も4枚、雄しべも4個あり、芒状の付属体が紫色を帯びているため目立つことから属学名の*Stemona*(雄しべ)が名づけられました。先の尖った楕円形の蒴果が実ります。

百部の原植物にはもう二種あります。中国中・南部に分布するタチビャクブ(*S. sessilifolia*)があります。根は紡錘形、多肉質で根茎から多数下垂します。草丈は30-60cm、茎は直立し無毛で稜があります。葉は倒卵形で、各節ごとにほぼ無柄で3-4枚輪生します。花期は6-7月、茎の下部の葉の鱗片葉の葉腋に薄緑色で鐘形の花を一個つけ、一見すると葉の中央で咲いているように見えます。

もう一種のタマビャクブ(*S. tuberosa*)は台湾から中国南部、インドシナ半島、インドにかけて分布する温暖な気候を好む植物です。塊根は多肉質で紡錘形か円柱形、長さ15-30cmと大きく、和名「タマ(玉)」の語源になっています。また、種小名*tuberosa*(塊根)の語源でもあります。地上部も同様で、春先に最大で4-5mにもなるつるを伸ばします。葉は対生で広卵形、4-6cmほどの葉柄があり、葉に並行する鮮明な葉脈が見えます。花は6-7月に葉腋に1-2個つけます。花の直径も約10cmと大きく、淡緑色で4枚の花被片に、東になった赤い雄しべがよく目立ちます。

日本に百部が渡来したのは享保年間(1716-1735)と伝えられています。享保以前の本草書『大和本草』(1709)には「百部 茎葉天門冬(クサスギガズラ*Asparagus cochinchinensis*)に似たり。雉がくし(*A. schoberioides*)と云う」と全く違うユリ科の植物を充てています。享保6年(1721)からの小石川御薬園の拡張の際に差し出された『御預御薬草木書付控』(1721-1728)の「享保十三(1728)戊申年中」に「(長崎より)百部 三株」と記されています。当時長崎は外来文化の中継地であったため、中国等から入った種苗は中継地として長崎御薬園で一旦育てられ、幕府やその他の御薬園に渡されていました。以後の本草書『物類品隲』(1763)には「百部 蔓生特生の二種あり。蔓生のもの鄭樵通志曰、葉薯蕷(ヤマノイモ*Dioscorea japonica*)の如し。……漢種上品、享保中種を伝りて今官園にあり」と記され、小石川御薬園に植栽されていたことが記録されています。

『本草綱目啓蒙』(1803)では「百部 漢産なり。故に今和名なし。大和本草にキジカクシと訓するは非なり。キジカクシは鬚根のみにしてふとき根なし。百部は草本、藤本の二種あり。共に享保年中に漢種を伝う。草本のもの苗高さ一尺許、数茎叢生す。葉の形橢にして尖り、只縦道縦道のみにして枝すじなし。節ごとに四葉対生して茜草(アカネ*Rubia argyi*)苗の如し。光滑にして毛刺なし。春嫩苗を生ずる時、根上一、二節は葉なくして花を出し、対生す」とタチビャクブの形態が詳細に説明され、「一種藤本の者も亦春舊根より嫩苗を生じ、藤蔓繁長す。節ごとに四葉対生す。……五、六月葉上蒂の方によりて数書を出し、日に一花を開く」とつる性のビャクブについても述べています。

(村上守一 記)